



# 白隠の生涯（中）

## 菩提心と 最後の大悟

柳 幹 康

二回の大悟を得た白隠を驚愕させた言葉——たとえ智者高僧といえども、菩提心の無い者はみな尽く地獄に堕ちる——について、白隠はその著作においてしばしば言及しています。白隠によればこの言葉は、彼が目にした『沙石集』（鎌倉時代の仏教説話集）において、概ね次のように説かれるものでした（『壁生草』巻上）。

昔、明恵と解脱という二人の学識豊かな高僧がおり、春日神社に折々参詣していた。二人がくると春日神は神殿の戸を開き姿を見せるのだが、明恵とは親しく言葉を交わすのに対し、解脱には背を向けるだけで何ら言葉を発しなかった。それを訝しむ解脱に対し、春日神は告げる。「学問が優れたればこそ後姿を見せたま

でのこと。菩提心を持たぬとは、返す返すも残念なことよ」。その夜、解脱が本を読んでみると、部屋の外で数多の化け物どもが取っ組み合いのケンカを始めた。それを見た解脱が震え上がっていると、いつの間にか傍らかたわにいた老人が次のように言った。「彼らはかつての智者高僧である。ところが菩提心が無かったため、死後こうして魔道に墜ちてしまったのだ。おぬしもこのままでは、いずれあのようになってしまうぞ」。こう言うと老人は白雲に乗り、春日神社のほうへと飛んでいったのであった。

この話を目にした白隠は、恐怖のあまり全身の毛が逆立ちました。菩提心は一般的な理解によれば、「菩提さとりを求める心」を指します。

ですが智者高僧と称されるほど仏教を深く学んだ僧侶に、菩提さとりを求める心が無いとは考えられません。では春日神の言う菩提心とは一体何なのか……、白隠はその後十数年もの間、この疑問に向き合い続けました。

白隠がその答えに辿り着いたのは、四十二歳の時です。『法華ほけきょう経』は取るに足らぬ譬たとえ話ばかりと曾て失望した白隠でしたが、ある人の勧めを受けてこの頃は『法華経』を日々読んでいました。そしてある夜、第三章の「譬ゆほん喩品」に読み進んだ際、蚕こおろぎの鳴き声を耳にして最後の 大悟徹底を遂げます（『年譜』）。この時に白隠は、「法施利他ほっせりたの善行こそが菩提心である」と気付いたのだと、後に自ら述べています（『壁生草』巻上）。

「法施利他」とは「法もて施し他を利す」

——教法おしえを説いて他者を救済すること——を

指します。つまり白隠は、自分のためだけに  
 仏教を学ぶのではなく、人々のために仏の教  
 えを用いてこそ初めて、自他ともに救われる  
 のだと確信したのでしよう。顧みるに、大悟  
 徹底に際して白隠が読んでいたのが、仏が巧  
 みに譬喩を用いて人々に法を施す「譬喩品」  
 であつたことは、単なる偶然ではなかつたよ  
 うに思われます。かつて取るに足らぬと失望  
 した譬喩のなかにこそ、仏教の核心があつた  
 のだと気付いたのではないのでしょうか。

なお白隠はこの時にはじめて、師の正受が  
 日ごろ示していた教えが分かつたのだと伝え  
 られています（『年譜』）。白隠によればその  
 教えの骨子は、以下のようなものでした——  
 悟りし後も修行に励まねばならぬ。第一には  
 常に正念（しょうねん正しい思い）を保ち続けること、  
 第二には四種の誓いを実践することである。

四種の誓いの実践とは即ち、(1) 仏教を学び、  
 (2) それを説いて人々を救い、(3) 自身の煩惱を  
 断ち、(4) 悟りを完成させることである——（『八  
 重えむくら蓮れん』卷三）。法施利他こそが菩提心であると  
 いう先の確信に鑑かんみて白隠は、正受が常々説き  
 示していたという一連の実践の意義、なかで  
 も仏の教えを人々に説く利他行の重要性を徹  
 見したのではないかと思えます。

そして白隠はその後、この確信を実行に移  
 していくことになるのです。

柳 幹康（やなぎ みきやす）

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課  
 程修了、博士（文学）。現在花園大学国際禅学研究所副所長・  
 准教授。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による  
 中国仏教の再編』（法藏館）。

# お願い

## 花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

\*ペ切りは毎月1日です。

## 『花園』へのご意見・感想など

本誌へのご意見・感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64  
妙心寺派宗務本所内編集室  
俳壇／歌壇／花園 係

\*住所、氏名を必ずお書きください。

\*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

\*なお投稿はお返しいたしません。



「いつもココロに花園を」  
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第69巻 第6号(通巻第814号)  
令和元年6月1日発行(毎月1日発行)  
定価55円

【発行人】栗原正雄

【編集人】畠中寿浩

【印刷人】喜田眞司

【発行所】〒616-8035 京都市右京区花園  
妙心寺派宗務本所 教化センター  
振替／01060-9-1400番  
電話／075-463-3121番

表紙の絵

「笑うと楽しくなる」



楽しいから笑うのではなく、笑うから楽しくなるのです。つらい時も笑って  
いこう。 絵・花咲幸絵

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。  
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

\*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。